

建國童話

— 講習會講演速記 —

久留島 武彦

久留島でございます。只今倉橋先生から大分御紹介を下さいます、いろいろ講習の中にまで御迷惑をかけたのでありますが、感心したのは久留島に倉橋は違ふけれ共、反對ではないといふ。これだけは私もホツ息をついだのであります。實はこの建國童話といふものを皆様にお話するやうになりましたのは、去年から倉橋先生が私に問題をお出しになりました、一つ考へてみないか、さうして出来るならば保育研究科の生徒に、それを順序を立て、話してみないか、斯ういふやうなお言葉であつたのであります。

より／＼材料を纏めて居ります内に一つテストをしてやらうといふやうな有難い思召しがあつたさみえまして、今年の紀元節にこちらの幼稚園にお招きになつて、お子様方にお母様方の前で御一緒に私の建國童話をお聴きになつて下さつたのであります。さうやら私はお話をして歸りました時に、テストにパスしたらうかオド／＼として心配して

歸ります、暫くして文部省の夏季講習會にその建國童話の實地について語るやう、成るだけ實演をやれ。私はこゝで丁度小學校から中學にでも入つた時のやうな心持ちがしたのであります。先づこれで無事に通過して、保育科の生徒のみならず、全國の皆様方の前で語らせるに足るといふ極め札を戴いた譯であります。

そこで今日は實際のお話を致します前に少しく私にも理窟を言はせて戴きたいと斯う思ふのであります。それはなぜ建國童話を求められるやうになつたか、今年の如きはラヂオの放送と言はず、或は精神總動員の一部の働きと言はず、またはパンフレット、或は雜誌、子供なきに關係したものに非常にこの建國童話、或はもう一つ高い標準で神話の翻譯、或は解説めいた材料の取扱ひ方、斯ういふのが非常に多いのであります。それを氣をつけて拜聴もし、拜見もしながら、私は甚だ懸念に堪へなく思つたのは、果して

建國神話、或は童話さいふものを御理解なさつてお話なさつて居るのであらうか、さうであらうか、たゞ時代が皇紀二千六百年、神ながらの道を解くのに都合がよい。或は國體明徴さいふ潮に乗る、或は總ての雰圍氣がさういふものを迎へ易い、これに乗つて仕事はされて居るけれ共、この乗る考の土臺になるものに果して何が故に求められ、何が故に斯ういふところへ世間が目をつけるやうになつたか、さうして斯ういふ方面を振り返つて見るやうな心持ちになつたかさいふことについて、私は疑ひなき能はずであります。無論、皆様方には左様な問題はお聞きになりませんが、貴君方が、これでいゝだらうか、斯ういふやうな話の方でもつて子供に建國の精神、建國の神々の御性質が判るだらうか、或は誤らせるやうなことはないだらうか、斯ういふお疑ひを持つやうなことはありませんでしたらうか、少なくとも私の聴き又見たところでは、たゞ時の流れに乗る、勢ひに乗るさいふだけであつて、何んらの工夫もなければ研究もなく、況んやこれを語らざるを得ざる心の土臺さいふものを持合せて居られない、率直に古事記の昔語りの中から手あたり委せに材料を引出す、或は神話の童話化したる中から遠慮會釋なく材料を持つて来る。それが子供にさういふ影響を與へるかを申しますと、一つの例であ

りますが、紙芝居をやつて居つた或る先生が

「高千穂の峯に神の御末、雲の上より天降りました」

と言ふ。その説明をしますのに、斯う高千穂の峯が見え、

中途に雲の繪が見えて、その下に神々がお立ちになつて居る。それを説明して居るさ、子供の一人が

「先生々々」

「何んですか」

「怪我しなかつたですか」

これは我々から言へば落し噺のやうな材料ですけれ共、子供の方から言へば真剣な問題であります。これを合理化しようとするばするほご話をする者の方に矛盾を感じるのであります。それでもつて自分が不安な感じを持ちながらさうして子供に或る物を與へ得るか私は斯ういふところからもう一寸我々が建國の神話、もう一つ根本から言ふならば神話さいふ成立ちのものか、これを考へてかゝる必要がありはしないだらうか、斯ういふことを頻りに私は左右の連中にも言ひ、少なくとも子供に神話を語るならば或る程度までは聊か深く掘下げて研究した後でないさ、百害があつても一利がないさいふ結果になりはしないか戒しめて居るのであります。

まあ斯ういふ前提から今日こゝに貴君方にも一つ御相談してみたい、或は一つ伺つてみたいと思ふのは、一體なせ

我々が神話を求めるやうになつたか、殊に建國神話を私共がなぜ語りよいやうな氣持になつたかといふことであります。これが私は重大なる問題ではないか、殊に本年の講習會は他の年の講習會とはその意味に於て意義が非常に違ふのでせう。皇紀二千六百年の文部省の講習會、これは先程も倉橋先生が仰しやつたやうに丁度國民學校といふ新しき御制定の下に我々は準備をしなければならん。これに直面して國民學校の意義といふもの、これの及ぼすところの働きから、先程御敷衍になつた幼稚園も、誰もがその言葉を使はんが、初めて使ひ出す國民幼稚園といふやうなもの、意義を持つやうな考を必要とするのではなかつたらうかといふお言葉の下に、いろいろ國家的といふ意味の御説明がありました。私は洵に有難いお話を私のためにお興へになつたと思ふのでありますが、なぜ我々は今年はさういふ方面に氣をつけなければならんか、こゝに我々は國家總動員といふものについて保育者の立場からお考へ願ひたい。總動員の必要は要するに、今日の時局を解釋し、さうしてこれを克服して行くのには國家の總力戦が必要であるからであります。あらゆる力を寄せ集げ用ゐなければ到底これを完成することが出来ない。こゝに於て國家總力戦に必要があるから總動員をやらなければならん。總動員となるこゝ一部の間ばかりではない。子供も病人も年寄も若き者も如

何なる者の力をも餘さず集めて一つの目的に集中させる。こゝに於て初めて大きい國の力といふものを長きに亘つて持ち續けると共に完全に安心して導くことが出来る。その國家總力戦に對して私共保育者としての力を何處に捧げなければならんだらうか、こゝところが時々私は誤解されるものぢやアないかと思ふのは、この國家總力戦を基調したる總動員の精神的現れが或る地方の新聞を見て居ります。幼稚園のおやつを保姆さん達が相談をして、これを一ト月分集めて、おやつをやめて、これを軍資金として獻納して、これは大變結構なことだといふやうなことが、或る地方の新聞に出て居りました。私は何んか穿違へから恐しい總力戦を發揮したものだらう、幼稚園のおやつをその幼稚園が家庭に代つてやるかといふやうになつたのは家庭にそれ／＼委せておやつを喰べさせて居る、家庭の程度、生活の高下によつて取入れるものも違ふ、或はお金を持つて自分自ら買ひに行くかといふやうな危険からして家庭は一切幼稚園にお委せて、幼稚園で適當な思ふものを――發育を幫助し、健康のために宜しいと思ふものを――おやつとして適當な時間にお興へ願ひたい。さうすれば家庭に歸つて不規則な、分量も決らないおやつをやるより子供のためにも宜しいからいふ家庭の信頼を受けて幼稚園へおやつを経費として毎日子供に持たせて来る

か、或は前に十日分十日分持たせて来る、その金を一つ軍資金に獻納しようといふので一月分集めて何圓何十錢をその地方の聯隊區司令部に出かけて行つて獻納し大變賞められたさいふ。それは私は賞めた者が誰だつたか、連れて行つた幼稚園がさういふ幼稚園だつたか知らないが、これこそ實に言語同斷、子供の養護、子供の健康、子供に幼稚園がおやつを與へるさいふこそは、子供の將來の心身を健全ならしめるために今日附託を受けて居る保育者として、これは重大なる國務を遂行して居るこころなのであります。所謂國家的に子供の體力の養成なり、良き習慣の養成をやつて居るのであります。それを替へて一時的の目の前の軍資金獻納なきさいふこころに幼児のおやつを缺いてまでも持つて行く、私はかゝる穿違ひが今日世間に多くあるのではなからうか、私はこれは倉橋先生が何んぞ仰せになるか知りませんが、私はは斯様なるこころに我々保育者としての一つの見識を持たなければならん。國家的であると同時に個性の完成であります。個性の完成を國家の目的に歸一せしめるやうに我々がこれを養護するこころが、これがこの時局に對する我々の總力戦への現れでなければならんのではなからうか、私は斯ういふ解釋から今のおやつの問題を以ての外の問題だご解釋するのであります。従つて私はこの同じ觀點から子供の心の養ひさなるこころの、その魂を

形造る、魂を導くこころの、このお話さいふものも矢張り二十年、三十年後に對する一つの準備として行く必要から、それにはこの建國の神話さいふものが非常に必要な問題としてこゝに考へられて来ると思ふのであります。

こころが、これは違つた立場から私は皆様にもお考へ願ひたいが、一體、人さいふものは大きい時代の變化、急激なる社會の動きに出つくはします、初めは驚く、さうして疑ふ。果して斯ういふやうな大きな變化を乗切ることが出来るか、さうであらうか、やり通すこころが出来るか、さうであらうか、こゝに於て非常に惑ふ。惑ふと同時に心弱き者は神或は佛に祈る。神社佛閣に參拜する者の多い時は必ず社會に大變動のあつた時であります。或は非常にショックを受けた時であります。然し次第に平靜を取戻すさいふか、落ついて考へるさいふさ、これはたゞ拜むだけでは相濟まん、寄り纏るだけでは相濟まん。己れを正しうして、先づ拜む心の立場からして改めてかゝらなければならんさいふので、拜む時に茶絶ちをして拜むさか、鹽絶ちをして拜むさか、水垢離を取るさか、己れ自らを振り返つて己れが拜んで、これを受けさせられる神佛があつた立場ならば、あの願を受け入れても宜しい。あの考ならば無理もないことだから、その願を許すべきだ、己れの清淨心、己れの信心の純潔さに正比例してお受けになるのではないかとい

ふ反證の元になる。こゝに於て身を責め、心を改めて御佛の心に叶ふやう、神の心に叶ふやう、信するやうになつて来る。かうなつて来るところに私は人間の寔に尊さがある。こゝでもう一つ振り返つて見るに、我々の祖先は斯ういふ場合にさうしたらうか、我々の國に斯ういふやうな變動が過去になかつたらうか、さういふやうな場合に我々の先祖、我々の前々の人達はさういふ工合に斯ういふ場合を乗切つたか、こゝに於て過去の歴史を調べ、或は我々の祖先のやり來つた行跡に目をつけて見る。斯ういふやうな傾向になつて来るところから次第々々に我が魂の中に潛まれて居る力はどんなものであるか、我が體の中に流れて居る血潮は果してどんな血潮であるか、この事件に對し、この偉なる時局の變轉に對して、果して我々は乗切ることが出来るであらうか、過去の我々の先祖は乗切つたやうである。失敗した者もある。その失敗は斯ういふところに基いたやうである。けれ共、成功した者は斯ういふ立場をまつたからだ。こゝに於て大きい時局に接する人は歴史を讀み始める、傳記を讀み始める。それは如何にこの頃の新聞小説に歴史物語を競ふて書いて居るかさういふことでお判りになりませう。宮本武藏を書かれ、源頼朝を書かれ、然も小説體としては小説日本外史なごいふ堅苦しい、今までの小説の題としては珍しい、明かに歴史さういふ表題まで打つたも

のまで書かれる。そこいらの民衆が見る娛樂機關の映畫の如きも、殊にこの社會の變遷に對して、我々の夢を破りし明治維新、あの若人達がその間をくゞりつゝも活動したさういふ、維新前後の材料が多く映畫にも取入れられ、さうしてチャンバラミート口に言ひますけれ共、あの劍劇の中に、あの中に運命を開拓して行くさういふあの維新の志士の向背が自分の心の一つの強さ、或は想像を與へて、あの調子で俺もやらう。あゝいふ工合にやつたら宜からうさういふ、ここに自己の満足を求める。私はその時代の姿に對しても因つて来るところを探し調べるさういふ必要な時機に出て來て居る。これが子供に對して私はこの二千六百年の今年、特にこの神話が求められるやうになり、何さなう神話に立ち返つて、これを材料さしなければならなくなつた原因ではなからうか、斯ういふところで考へてみますに、さらば神話さういふものは子供に話し易いものであるか、さうであるか、こゝで一吋神話を聊かばかり振り返つて見る必要があると思ひます。

神話さういふものは、實はこれは子供なごに話せるものではない。極く大摺みに言つてさう言つて差支へないさ私は思ふ。非常に複雑なものであります。今日ではお亡くなりになりましたが、高木敏夫先生、日本唯一の神話學者でしたが、その後、松本武雄或は肥後一夫學士の如き、或はだ

んだんミ神話の研究者が相次いで出て來られたのであります。であります、そのミの方々の御研究になりましたものを拜見しても神話ミいふものは容易ならざるもので、搔き込んでそれを申しますれば自然現象や、生活現象の中に一つの神秘性を求めて、その不思議なる力ミ我々ミの關係するミところに信仰が働く、その關係に信念を持つやうになるミ、何時かそれが自分の主觀から現れたものが、客觀的實在性ミでも難しく言ひますれば言へませうか、何時かさういふものがあつてミいふやうなミに纏めあげてしまふ。

さうしてそれがずつミ傳はり傳はつて今日にやつて來た。斯ういふやうにも言へるのであります、初めは例へば森の中の出來事、或る大きい木の枝が榮えて行く、何んにも不思議はないのであります。ミところが大風に出つくはせば、その古い枝が折れる。これも不思議なミではない。ミところが、その自然の現象の中に、さうもあの木は新芽が殖え、小枝が繁昌する時は何時でもこの村が五穀豐穰である。あの木の枝に何か故障がある時は何時でもこの村に災難がある。斯ういふやうなミを誰が考へるミなく、誰が認めるミなく、自然の現象の間にそれミ自分ミの連帶性を認めるのであります。關係の深いミを認める。それから、殊にあの木は前に平家の落武者が逃げ込んで隠れて居つた時に、この村の年寄が、これを匿つて居たら、それを

見顯はされて、さうして引出されて殺された。哀れたいけな無慘な最後だつたのでいミも懇ろに弔ひ、一本の櫟の木を植えた。その櫟の木が大きくなつて今日あの大きな木になつた。さうして埋められた人が、自分を弔つてくれミ、木によつて村に感謝し、その木の榮えるミによつて村の繁榮を説明し、或は木の衰へるミによつて村に一つの警告を與へる。それに違ひない、さうであらう、さうである、ミいふやうになつて來た。これが一つの神話ミいふやうなものになつてしまふ。畢り自然の現象であります。それミ自分ミの連帶性、それによつて來るミところ、それが今日まで傳はつて、その信仰が深くなつて行き、或はまた生活現象の中からさうも我々には一つの因果關係がある。この村ミあの村ミの間にさうも因果關係がある、ミいふやうなお互ひの生活の間に何かさうしてもそこに運命つけられた問題があるやうな氣がする。妙にさういふ傾向になるミいふやうなミを見るミ、そこに一つの解釋が現れて、その解釋が初めは主觀であるのであります。自分獨自の考から解釋をつけて行く、それが何時かだん／＼進んで行くミ、誰がそれを傳へるミなく、誰の心にそれが根をおろすミもなく、これが遂に客觀化されて動かすミの出來ないものになる。斯ういふものでありますから、神話は信仰を離れて神話なしミ言つても宜しい、これに信念を持つ、さうし

て、それと自分とが相關聯性を持つて居る。相連帶性を持つて居るさいふこゝにならぬ神話さいふものは力が無いのであります。

まあ斯ういふやうな理窟尙解釋に誤りがないとしたならば、斯ういふものを幼稚園の子供にさうして因縁さいふものゝ恐しいもの、あの木の枝が榮えるさいふも、この村がすつと繁昌する。あの木の枝が折れた時にこの村が焼けた、これが幼稚園の子供に判らせられる話の材料でありませうか、さうでありませうか、斯ういふやうなことを考へてみますと如何に時代の潮に乗るのが都合がいゝかは言ひながら中々うっかり神話は使へないが、こゝでいろゝの民族、いろゝの國にはそれゝの神話の特徴があるのではありません。その特徴を見ますと、使へる神話があり、使へない神話がある。これは高木敏雄氏の分類されたもので、これを見ますと私共が非常に仕合せであると思ひますこゝは、日本の神話は使ひ易いのであります。これは實に有難いことであります。こゝへ一寸書いて置きます。高木敏雄氏はもう亡くなりましたが、さういふ學問の認められぬ時代に黙々として研究を重ねられました。遂に博士號も取られずお亡くなりになりましたが、日本の神話、或は傳説を研究された方でありませう。先づ斯ういふやうに分類されて居ります。

印度神話、印度神話の特徴は宗教的である。これにはいろいろの理窟もありませうが、然し我々は學者になる譯ではないから、これを別に詳しく説明する必要もありませんでせうし、また異論のある方もありませうから……

北歐神話、これはスエーデン、ノルウェー、アイスランド、デンマーク、ドイツ斯ういふ方面を基調とする神話、その北歐神話の特徴は哲學的であるのであります。

ギリシヤ神話、ギリシヤ神話の特徴は社會的であります。支那神話、支那神話の特徴は民族的であります。

まあ斯ういふやうな工合に分けられて居る。そこで日本神話の特徴はさうか、これは國家的である。この分類は私共にまつては寔に都合がいゝのであります。この國家的さいふ問題は、これは松村武雄博士も、これについて敢て國家的さいふ解説は加へて居らないが、日本の神話ほゞよく纏まつて系統立てられた神話さいふものは世界にない、一つの立派な建國神話だ。松村博士は言つて居られる。この點に於て日本の神話は文化的の生活から言ひますならば、餘程この時代が新しい、さうして文化が進んだ後に纏められ、さうして今日の立場をまつたものゝ解釋しても差支へないであらうかと思はれる。この建國的の神話、國家的の神話、この神話に基いて、さうして日本は導かれてやつて來た。私共はもう一つこれに對して愉快に思はれる。こゝは、この

神話から導かれた國家そのものゝ生活が常に皇室を中心とした國民の生活繁榮或は健全なる進歩さいふものを記録したものが日本の歴史となつて居る。これは貴君方もラヂオで聞いたことがありませう。植木直一郎博士が十日間續けて神典の講義をして朝々ラヂオで放送された。その神典の御講義の中に、このことに觸れて言はれたのであります。

實に日本の歴史の明快なのは皇室を中心とした國民の進歩發達、或は繁榮さいふものゝ記録である。であるから總て言葉までが左様になつて居る。さ植木さんは放送され、一寸興味ある問題をつけられたのは皇室の在るところが上であり、さうして皇室の無いところが下であるさいふところから、列車が皇室の在るところに進むのを上り列車、皇室から離れて行く列車を下り列車さいふ。それで今上り列車が碓氷のトンネルを下つて居る。今下り列車が箱根のトンネルを上つて居る。これは何んにも我々は不思議に思はんでせう。京さいふ言葉を使へば京へ上つたさいふ。江戸さいふ言葉を使へば江戸に下るさいふ。言葉は少しも不自然でない。けれ共、江戸さ東京さは同じ土地である。同じ土地でありながら江戸は將軍家が主體だつたから江戸を下るさいふ。東京さいふ京さいふ字がつけお上りさんが銀座を今押し廻して居るさいふ。これは銘々の間に國民性さいふものが國家を受繼いで來た生活、或は精神的狀態から

常に皇室を中心として今日まで進歩發達して繁榮した記録であるさ植木博士が言はれたのは寔に無理でないさ思ふのであります。この皇室を中心とした建國神話、これは實に私達が扱ひ易い、これは寔に私達が扱ふのに易い材料である。斯ういふところから着眼して参りますさ、日本の神話は——外の國の神話は哲學的であるさか、或は宗教的であるさか、信仰さいふものが何んであるさか、信念さいふものがさういふものであるか判らない者に印度神話なさを材料として話さうにしても、これは容易に話しくいのでありますけれ共——皇室中心の日本の神話は、斯ういふ自然の發達があるならば、國家の今日の繁榮は、この繼承繼續に基く、その繼承繼續の因つて起るところを我々も調べて自己の生活を導かれるさいふことは寔に私は安心なことであり、さうして最も自然のことである。私はよくそれで建國神話を語る時に斯ういふことを言ふのであります——これから話が飛び飛びになりますが、——今日まで日支變遷を言つて居つたものが、誰が言ふさなく今日では興亞の聖戰と言ひ始めた。これは子供に訊けば一番よく判る。

「この興さいふ字はさういふ意味ですか」

さいふ

「興さいふ字です」

「いふ。」

「亞細亞は何んですか」

「いふ。」

「亞細亞です」

「いふ。」

「亞細亞を興す者は誰ですか」

「いふ。」

「日本です」

「いふ、そこで私は」

「大變な仕事を引受けたものですねエ」

「いふ、そこで子供は初めてさうかなアと思ふ。興す者は日本、興る者は亞細亞、亞細亞に幾つ國があるでせう。

滿洲も亞細亞、支那も亞細亞、フィリッピンも亞細亞、ボルネオも亞細亞、ジャヴァも亞細亞、スマトラも亞細亞、印度も亞細亞、西藏も亞細亞、トルキスタンも亞細亞、アフガニスタンも亞細亞、斯う言ふ子供は澤山あるんだなアと思ふ。まだイランもあり、イラクもあり、アラビアもあり、いろいろの國がある。その亞細亞を興す、随分なものでせう。そこで

「貴君方も起された」が有るでせう。早く起きなさい、早く起きないと學校が遅くなる。起きよ〜いふと随分寢心地のいゝ近頃の朝は起きるのが嫌でせう」

これは誰も子供の思ひあたることです。

「そこで、起すいふだけでもお母さんは骨が折れる。時には蒲團に嚙りついて居る。ぢやア剥いでやるゾ言つて蒲團でも剥ぐとそれから一日機嫌が悪くなる。假に兄妹三人寢て居るさするさ、お母さんはごんなに骨が折れることだせう。さア兄いちゃんからお起さなさい、兄いちゃんが起きたから今度ほ姉エちゃん言つて居るさ兄いちゃんが何時の間にかクル〜ツと寢てしまふ。あゝ兄いちゃん寢てはいけません。あゝ姉エちゃんも寢てしまつた。さア起きた起きた。毎朝三人の子供を起すのにぎのくらる骨が折れるでせう。それと比べるさ我々が亞細亞を興すのにぎのくらるかゝるか、三年や七年で澤山の國を、日本いふ親が、日本いふ兄が起すのにぎのくらるかゝるか判らんでせう。この起きよ起きよいふことは、これは我々の今日の考ちやアないのです。亞細亞を興すいふ考は、これはむかし〜神武天皇様が日本をお起しになつた抑々のお話があるのです」

斯ういふやうにして私達は建國神話を持つて行くのであります。

それは皆様方も御承知でもあらうと思ひますが、宮崎縣——宮崎縣の方がこゝにもおいでと思ひますが、一寸手上げて御覽なさい。お二人ですか——宮崎縣の方は御承知

であります。美々津さいふ濱邊の町があります。その濱邊の町を神武天皇様がお出かけになつた。その時に、あの町に今日でも傳はつて居りますお言葉が——神武天皇様のお言葉であらうさして傳はつて居るお言葉が——あります。それは「起きよ、起きよ」さいふお言葉なのです。こゝで一寸そのお話を暑さ凌ぎに致しませう。

これは地圖を書いた方が宜しい、河が斯う流れて居て、こゝに山がある。こゝには木が茂つて居る。こゝは砂濱、河は斯う流れて居る。こゝに岩がある。海の中に、こゝに長い岩がある。こゝが美々津と言ひまして、斯ういふ字を書きます。この河は美々川さいふ河ですが、これは必ず耳さいふ字を使つて耳川と言つて居つたのでせう。それが神武天皇様がお出ましになつたので美しいお船着き場所、それが御叮嚀になり美々津になつた。おみおつけさいふおん御叮嚀になつたのと同じ意味で、美しき津、即ち美津、神武の帝が御船出を遊ばした所であるさいふので美しい美しい美々津。昔の人はよく斯ういふ習慣がある。何んでも同じ言葉を重ねて使ふのです。美しい美しい美々津、それで美々川になつたらうと思ひます。この美々川の裾の砂濱のころへお造りになつた船をお集めになつて、さうして御船揃ひが出来たが、空模様が悪くて、さうして一向に波が風ぎない、うねりが高い日向灘であります。そのうねりが高

いために毎日々々一週間ほさお延しになつて、或は風を上げて風をお知りになつたさいふ傳説もある。風の工合、風の強さをお試しになつた。さうして、これならば風も風いだし、明日あたりは船出をしても差支へないだらうさいふので御家來にお言附けになつて船揃ひをさして、明日の晝は乗出すから、その準備をしろさいふので、そこで喰べ物や道具を乗せ、皆が一生懸命船出をする間に、こゝまでお供して來た田舎の人達、お爺さんもありお婆さんもあり、子供もあり、若い者はお供に出て行く者は張り切つて胸を叩いてお船に乗つて居る。然しお供になれない者は「しつかりやれヨ、俺の代りにやつてくれ」さいふ。今夜は陸で睡る最後の晩ださいふ、ゆつくり寝めさいふので皆大の字になつて轉がつて寝た。ところが寝られないのはこゝまでお送りして來た日向の田舎の人々、明日は愈々お別れ、何んさいふ物淋しいこゝだらう。今までは神様の御末、この日向に天降りまして、我々の間にお住ひになり、山の中に居るあらぶるもの、或は森の中に隠れて居る土蜘蛛、熊襲、これを御征伐下さつて穏やかにして下さつたのは有難いけれ共、まだく廣いこゝろへお出ましになるのでお止め申すこゝは出来ない。然し明日お發ちになつたらさうなるだらう。皆溜息をついて、あちらに五人、こちらに十人立ち立ち圍んでコソコソ話をして居るさ、一人の者が

「さうだ、一つ最後に何かもう一度差上げようぢやないか、何ももう上げるものは上げてしまつて何も無い、けれど、何か思ひつきがあるか」

「さういふ、一人の者が」

「それは、これから先は長い御船路を海の上にお過しになる。海の水は鹽辛い、それで顔をお洗ひになり、お嗽ひしても鹽辛い、それで終ひには海の上の風を受けるご御身體までも波の水で鹽辛い、それだから、もう辛いこれからのお過しをなさらなければならんから、さうだ甘いものを何か考へて差上げようぢやないか」

「何かあるか」

「小豆がある。あれを捏ねて餅を搗いて餅にまぶして差上げたならば、これは必つごお悦びになるだらう」

「若い者も悦んで」

「それは俺達も好きだからなア」

「お前達にやるのぢやアない」

「何んでもいゝから杵を集めろ、臼を集めろご夜中までかかつて仕度をして、明日の朝早く起きたらば搗き始めようさいふので、こゝで皆が仕度を整へて寢てしまつたが、小豆は前の晩から煮なければ煮上らないから誰が宜からうさいふので、それは年寄が一番いゝから年寄に頼まうぢやアないか、こゝで集まつた者の中から年寄を一人二人頼ん

で、ぢやア私達が小豆を煮る方へ廻らうご、時々蓋を取つては摘んでみ、さうするごお婆さんも横の方から

「お爺さん、汚ないヨ」

「だつて摘んでみなければ判らないヨ」

「お爺さんが水つ澁を落すかと思つて……」

「だから摘む前に吸つたぢやないか」

「その手で摘むから尙汚ないぢやないか」

斯うしてお爺さんごお婆さんご叱言を言ひながら小豆を煮て居るご、さうやら夜中の一時頃になるご煮えて、親指で押してみるご軟かに煮えて居る。さうしてこれをまた口に入れるごお婆さんに叱られる。

「勿體ない、神武天皇様に差上げるのではないか」

「いや、お毒見さいふごごがある、喰べてみなければ判らんぢやアないか」

「ぢやア、まアそれでいゝから明日の朝起きたならば早くそれを捏ねよう」

「さいふので明日の朝早く起きて捏ねる心算で二人は肘を枕にして寢ようとした時にお爺さんが一寸外に用を足しに出て、空を仰いで見るごお星様がきらめいて居る。

「あゝ、いゝ空だ、まるでお星様が降るやうだ、これならば明日の御船出も寔に上々吉おめでたいなア」

「ご思ひながらフイご氣をつけて見るご、右なゝめの森の

中にチロ／＼と灯が見えて居る。篝火であります。二つ三つ並んで居るところは、あれは神武天皇様の御寝みどころ、今頃は定めし御寝なさつて居るであらうと思ふ。二人は、さうか御夢安らかに、日向の御名残りも今夜限り、静にお寝みになりますやうに二度三度頭を下げて、フイと頭を上げた時にギイ／＼といふ戸のきしめく音がしたと思ふ。

「起きよ、起きよ」

さういふ重々しいお聲がした。お爺さんはハツと思つて聞き耳を立てる。ミバタ／＼と五六人の掛け違ふ脚音が聽えて、聽てお言附けを承はつてか、右、左にこれが別れる。今まで二つしか見えなかつた篝火が五ツ、七ツ、十、あちらの森、こちらの砂濱、海際にまでだん／＼篝火の数が殖え始めて、その邊に寝んで居るお小屋の戸を叩いて、起きよ、起きよと起し續けて居る聲を聽いた時にお爺さんお婆が

「お爺さん」

「何んぢやない」

「何んぢやないか、神武天皇様のお聲と思はれる起きよ起きよといふ御聲がする。皆起して廻つて居る。これから寢たのでは間に合はんぞ、私はこつちを起すから、お前はそちらを起して廻れ」

と起して廻る。聽て起きよ起きよの聲につれて村の若

い者が起きて見る。炎々燃えさかる篝火は、これが海際までずつと燃えたとて居る。さうして、もう既にお手廻りの荷物はお船に運んで居る姿を見て、若い者は狼狽えて、早く火を起せ、早く火を立てろ、お米を入れろ、蒸籠をかける、それをももごかしく臼に入れて手杵で三人五人で搗き、その間に頭を割り込んで餅を引つくり返す、押すな押すな頭を搗くぞと、搗き上げる内に一人の若者があーツツと聲を上げたと思ふ。さういふきなりそこへ膝をついた、さうしたのだ。さういふ、あの岩の上に夏の夜も明け易く東の海から桃色の雲が柵引いたと思ふ。さうツツ一條の光り、天を射る金色の輝き、それに照し出ださせられて海際の岩の上にお立ちになつて居るのは眞つ白い白妙の御召物、右手に梓の弓を、お背中に御胡篋を背負つた神武の帝。これを見た時に、そのまゝに拍手を打つて拜み、初めて皆も神武の帝あそこに出でさせ給ふ。我れを忘れて拍手を打つて拜んで居る時に

「早く小豆を練らない。餠にならないぜ」

さういふので、それは大變、煮えて居るけれ共、餠に捏ねない餅にまぶすこまが出来ない、さうする。狼狽えた者が

「お爺さん、鍋を持つておいで」

と、何んと思つたか鍋の小豆を手で抄つて白の中にこれ

を放り込んで、

「もう間に合はないから一緒に搗いてしまへ」

それで餅と一緒に搗いたのが事實であります。そのため今まではポツタン／＼と言つて居つたのが小豆が入つたので定めし音も違つたであります。ペツチャン、グツチャン、ペツチャン、グツチャン、小豆の皮が撥ねる。さうして小豆餅が半搗になつて搗き上げるミ取敢へず御船に召さすので上がるまいと柏の葉に重ねて神武の帝の前へ恐る恐る年寄が二三人で持つて行き、何んこいふむさいものかとお叱言を賜るかと思ふと、神武の帝は

「これは何か」

ミ仰せになつた。赤いやうな白いやうな色合ひをして居る。そこで年寄は恐る／＼

「間に合ひませんので小豆を搗き入れまして……」

ミ申上げた。さうするに

「あゝ搗き入れか」

ミ仰せになつた。さうして、そのまゝお取りになつた。

これを拜見した年寄達は涙をこぼして、あゝ召上つて戴いた、召上つて下さつた、何んこいふ有難いことか、それから餅を皆のつわもの達にも頒けるに、搗き入れたのもあるし、餅き入らんのもある。喰べてみるに寔においしい、これを皆に頒つて、麩で御船に乗るに最後の御名残りさいふ

ので、この海際に並んで、御名残りでございます。御名残りでございます。ミ言葉を重ねても心は盡きない。その内にだん／＼一艘また一艘御船はこの間から海に出て行く、御船は波にゆられ／＼姿を一艘々々消して行くにつれて渚に手をつけて居る人達の心はだん／＼淋しくなつて行く、遂に最後に神武の帝の乗らせ給ふ御船の姿が岩ミ岩ミの、この間から姿を消した時にワーツミ思ひ餘つて泣いて砂濱に頭をつけてしまつた。あの岩ミ岩ミの間から出られて二度ミ再び日向の土地にはお歸りにならないのだと思ふミ怨めしきはこの岩の姿、この岩が最後の姿を隠し参らせたさいふので美々津の人々はこの岩ミ岩ミの間から海に出て行かないのであります。これを七つ岩ミ申して居ります。この七つ岩の間からは断じて海に乗り出さない。然も美々津の人の半は漁民であります。海で暮す船乗りであります。漁捕るすなざりびさであります、あの岩ミ岩の間から出て行くに二度ミ再び歸らないさいふので今日でもこの海に出ます時には必ず上に廻るか、下に廻るかして海に出る。魚を澤山捕つて歸る時にはあの岩ミ岩の間を通つて歸つて参ります。如何にこゝに信仰さいふものが恐ろしいかさいふことが判るのであります。こゝに一つの判断によつて、あの岩の間から出る者は二度ミ歸らない。昔も今も然りと思ふ連帶性であります。これが人の心に、殊に縁故の

ある我が神の御末、我々も御一緒に住はせられた方々があの岩から出られたのであるから、我々もその流れを汲みその御血筋を襲け、その中に暮した同じ民草として、矢張りあそこから出るさ我々も歸つて来ない、こゝに神話さいふものゝ強さ、こゝに神話が信仰的に働くのであります。これが信仰的に働いて連帶性が強ければ強いほど神話によつて指導を受け、神話によつて生活が變へられる。今日漁民の生活から言へば、この岩の間から出れば早く海に出られる。けれ共、斯ういふやうなところに神話の働く非常に力強い影響が認められるのであります。

そこで話は元に戻りまして、彼等は嘆いて砂濱に頭をつけて居つたが、もう二度と再び歸らせられないことになるさ、スロ／＼立ち歸つて家の中に入る者もあり、門口に立ちすくんだ者もあり、誰の顔も蒼くなつて居りますさ、その時に一人の者がフイさ氣がついて、これはいかんぞ、こんなことで氣を落して居るさ、折角山の中に追込んだ熊襲がまた出て来る。谷の中に追入れた土蜘蛛が、這ひ出して来る。さうするさ、この日向は、また荒びた國になる。朝、起きよ、起きよ、神武の帝が仰せになつたのは我々も元氣を起せ、さうして日向を興せさいふお聲さ我々も考へなければならんのだやアないか、それならば神武天皇様のお言葉をお忘れぬために——お遺しになつた御心持ちを忘れない

ために——子々孫々まで一年に一度、この御船出の日は皆起きて、あのお言葉に従つて、戸を叩いて起さうぜ、さうして起きたならば搗入れ餅を搗いで、さうして御祝ひ申上げてこの心持ちを忘れないやうにしよう。それから二千六百年、今日でも美々津では舊の八月一日が御船出の日さ言傳へられて居りますが、その日は門の戸を叩いて、起きよ、起きよ、病人があらうが何んであらうが、この晩だけは遠慮しない。起きよ、起きよ、さうして皆起きる。起きたならば餅を搗く、それが未だに餅の中に小豆を放り込んで搗入れ餅さいふ。それを近頃宮崎縣へ参拜する人が多いので、これを一包十錢で賣つて居ります。

「名物、搗入れ餅はさうですぞ」

さいふ。別に貴君方に廣告を頼まれた譯ではありませんが、この話をしたところが倉橋先生が、それは大變にいい、それでは來年二月十一日必ず搗入れ餅をこの幼稚園の子供に配らうさいふお話で、そのことを宮崎縣の美々津の町長に私が會つた時に話しましたところ、それでは入念にうまく拵へませうさいふことになりました。兎に角、二千六百年前からの形は違ひます。無論二千六百年前には砂糖はなかつたのでございませう。たゞ小豆の甘味だけの甘味でありますけれども、これを傳へ傳へて名物搗入れ團子さ言つて居ります。

こゝで更に面白いと思ひますことは、三年前から宮崎縣知事が、この「起きよ」こいふ神武の帝のお言葉が残つて居るこいふことを承はつて、是は美々津だけに傳はる御聲の響きと思つてはならない、宮崎縣を興す、宮崎縣振興隊こいふものを作つて、この「起きよ」こいふお言葉をもつて守りの言葉にしようこいふので縣知事が主張しまして、集團勤務の初めに「氣をつけ」こいふを整理さして「起きよ、起きよ」こいふ。之が今では宮崎縣の總ての呼聲になつて居ります。

こころが、ついこの間參りまして、そんな副影響もあるこゝかと思ひましたが、この間宮崎の車庫に勤めて居る鐵道の幹部が轉任して行くこいふので、その車庫に勤めて居つた若い者が見送りの際にプラットホームに立つて「起きよ、起きよ」こいふ言つた。さうするこゝ、その奥さんが顔色變へて御主人のうしろからしがみついて居る。「起きよ、起きよ」もう奥さんは泣き出しさうな顔をして居るのです。それで後で考へ出しましたら、その奥さんの名前が「おきよ」こいふ。奥さんはさういふ意味を知らんから何か餘程主人に恨みを持つて居る人が、この時に私を侮辱するのこいふ思つてベツをかいて今にも泣き出しさうになつたさうであります。これ等は思ひがけん副作用であります。この「起きよ」こいふ御魂が二千六百年後に天に口なし人をもつて言はしむ、その時の御言葉が遂に日本の地を興し、亞細亞を

興すやうになつた。斯う解釋致しますこゝ、茲に神話の寔に嚴かなる一つの暗示的の働きも我々は考へさせられます。

そこで私は斯ういふやうに言つて居るのであります。これは序であります。子供に話をする時に、今年は二千六百年こいふが、なぜ二千六百年をそんなにやかましく我々は言はなければならんか、悠久二千六百年、久しいから、永いから斯ういふのであるこいふならばまだ永い歴史を持つて居る國は外にもある。支那は五千年の歴史を持つて居る。さうしてみるこゝ日本より二千四百年多いのです。日本が悠久二千六百年こいふならば、支那は悠久々々五千年こいふ言はなければならん。大概子供は笑ふのであります。まだある。エジプトこいふ國は七千年の歴史を持つて居る。嚴としてエジプト學者はこれを傳へて居る。その七千年から二千六百年を見たならば恰もこれは赤ん坊ぢやアないか、七千年を悠久に當嵌めたら悠久々々々々々々七千年、何が二千六百年が誇るに足るか、こいふ言つた時に貴君方はさう言ひますか、子供は首を振るのであります。貴君方は何んこお考へなさる。唯、歴史が古いから、唯時代が永いから、こいふのならば外にもある。そこで私は斯う考へる。一つの魂が命を持ち、力強く國を護り、國を導き、國を育て、二千六百年續き、魂の燦爛として光輝を放つて居るやうな魂を持つた國の歴史が外にありますか、まだ二千六百年で

は終らない。これから、この二千六百年を育み、護り育てた一つの魂がこれから五千年續くか、一萬年續くか、さのくらゐ續くか判らないを考へたならば、これこそ眞に悠久なる命、悠久なる力、この命と力をもつた魂を隣りの支那に比べて見るに、支那は五千年の歴史はあるけれど、五千年の間に魂は二十六ぺん變つて居る。良い魂もあつた。悪い魂もあつた。悪い魂もあつた。慘虐無道な魂もあつた。

いろ／＼な魂で導かれ、いろ／＼な魂で育み育てられ、いろいろの魂が力強く働いたから、二十六ぺん變つた内には困つた魂もあれば、出來損ひの魂もあつた。今蔣介石が重慶の奥で育み育て、護り育て、居る魂なごは出來損ひの中の大きい出來損ひであります。そこで私は支那の方に失禮ですけれ共——貴君の今持つて居る魂はこの二十六の魂の中のごれですか、貴君の頭の中に傳はつて、貴君の力になり、貴君の命になつて居る魂はさういふ魂ですか考へて下さいと言はれて支那四億の人達は、私の魂は疑ひもなくこの魂だと言ひ得る者がありますまい。然し私は皆さんに訊いてみたい——ご子供に言ふのです——皆さん方の魂は爆彈三勇士の魂と違ひますか、皆さん方の魂は二宮尊徳の魂と違ひますか、皆さん方の學校の校庭に建て、ある楠木正成の魂と皆さんの魂と違ひますか、和氣清麻呂公の魂と皆さんの魂と違ひますか、僧道鏡がやつて來たならば皆さん方は和氣清麻呂公にならない人はないでせう。恐

れ多いが神武天皇様の御魂も我々の魂も一寸も違はない。貴君方の魂は二千六百年前からすつと傳はり來つた大和魂であることは間違ひないことです。さうしてみるに今持つて居る魂は百年前、五百年前、千年前、二千六百年前から傳はつた魂ださういふことをはつきり知つて下さい。私はこれを子供に知らせることに於て建國神話が必要だを信ずるのであります。

それで私共の手の手の中を流れて居る血潮は二千六百年前からまぎれもない血潮、お裁縫が出來なかつたら手を叩いて下さい。「起きよ、起きよ、起きよ、起きよ、算術が出來なかつたら頭を叩いて下さい。「起きよ、起きよ、起きよ、起きよ、起らない、起ち上つて考へなさい。自分は尋常四年生でも魂の力は二千六百年前からの御先祖の力ださういふことを忘れてはいけません。そこで興亞の聖戰の「興さういふ字、「おきる」さういふ字を使つたのは新聞社が使つたか、或は誰が使つたか知らないけれど、兎に角、私共の中に興さういふ考が傳はつて居つたればこそ、「起きよ、起きよ」のお言葉を神武天皇様がお用になつたさ考へるのは當然であります。まア斯ういふやうに私は神話と現實の生活を結びつけ、殊に建國の精神と現在との喰違ひのないことを子供に判らせたいさういふので、斯ういふ扱ひ方をして居ります。一寸こゝで十分ほご休憩致しませう。(つゞく)